

各部工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

- 1. 銅板葺屋根に取り付ける軒樋については、耐候性を考慮して、銅との電位差が大きい溶融亜鉛めっき銅板製のものとした。
- 2. 防火区画の壁を貫通するダクトにおいて、防火区画に近接して防火ダンパーを設けるに当たり、当該防火ダンパーと当該防火区画との間のダクトは、厚さ1.6mmの鉄板で造られたものとした。
- 3. 金属板による折板葺において、タイトフレームと受け梁との接合については、風による繰返し荷重による緩みを防止するため、ボルト接合とせずすみ肉溶接とした。
- 4. 軽量鉄骨間仕切壁内に配管する合成樹脂製可とう電線管(PF管)については、バインド線を用いて支持し、その支持間隔を1.5m以下とした。

樋

空調

金属屋根

電気

PF管

5階建ての建築物における各部工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

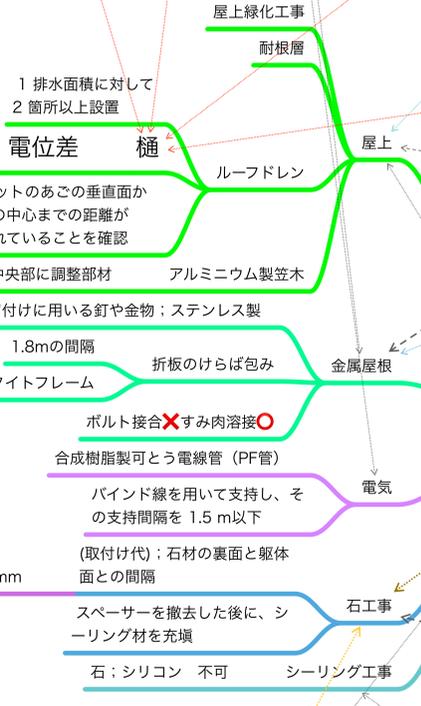
- 1. 呼び径150の耐火二層管の横走り配管工事において、吊り金物による吊り間隔を1.5m以下とした。
- 2. とい工事において、硬質ポリ塩化ビニル管を用いた屋外の「たてどい」のとい受け金物については、特記がなかったので、3m間隔となるように取り付けられた。
- 3. 軽量鉄骨壁下地において、コンクリートスラブへのランナーの取付けについては、打込みピンによる固定とし、その間隔については、900mm程度とした。
- 4. 横引き配管等の耐震対策において、最上階のケーブルラックについては、耐震クラスSに対応する必要があったので、6m以内の間隔でSA種の耐震支持を行った。

配管

樋

軽鉄下地

配管



1 排水面積に対して 2 箇所以上設置

あご付きパラベットのあごの垂直面からルーフドレンの中心までの距離が400mm確保されていることを確認

中央部に調整部材

留付けに用いる釘や金物：ステンレス製

1.8mの間隔

折板のけらば包み

ボルト接合とすみ肉溶接

合成樹脂製可とう電線管(PF管)

バインド線を用いて支持し、その支持間隔を1.5m以下

70mm

スペーサーを撤去した後に、シーリング材を充填

石：シリコン 不可

各種工事に関する記述において、監理者が一般に行うものとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

- 1. 施工中における建具の伴については、コンストラクションキーシステムを用いたので、施工完了後に、シリンダーは取り替えずに工事用の伴から本設用の伴に切り替え、不用となった工事用の伴が回収されていることを確認した。
- 2. 屋上緑化システムを採用した屋根に設けるルーフドレンについては、その口径が目詰まりを考慮して余裕のある管径になっていることを確認したうえで、排水面積に対して2箇所以上設置されていることを確認した。
- 3. 軽量鉄骨天井下地工事において、照明器具の設置に当たり、野縁及び野縁受をやむを得ず切断しなければならなかったため、溶解することを承認した。
- 4. 内装工事において、タイルカーペットをフリーアクセスフロア(高さ調整式)に敷設するに当たり、フリーアクセスフロアの床パネルの段違いや徐間が0.5mm以下に調整されていることを確認した。

建具

鍵

樋

軽鉄

床内装

フリーアクセスフロア

各種工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

- 1. アースドリル工法による場所打ちコンクリート杭工事において、鉄筋かごの建込みの際の孔壁の欠損によるスライムや建込み期間中に生じたスライムの処理を行う二次スライム処理については、コンクリートの打込み直前に、水中ポンプ方式により行った。
- 2. 屋根工事において、銅板葺きの留付けに用いる釘や金物については、ステンレス製のものを使用した。
- 3. 塗装工事において、屋外に露出する亜鉛めっき鋼面への錆止め塗料塗りについては、特記がなかったので、一液変性エポキシ樹脂さび止めペイントを使用した。
- 4. 外壁乾式工法による張り石工事において、目地に用いるシーリング材については、特記がなかったので、シリコン系シーリング材を使用した。

杭

金属屋根

塗装

石

シーリング

各種工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

- 1. 銅板製屋根用折板を使用した屋根工事において、折板のけらば包みを1.8mの間隔で端部用タイトフレームに取り付けた。
- 2. 鉄筋コンクリート造の建築物の屋根スラブに縦形ルーフドレンを取り付けるに当たり、梁との干渉がないことを確認のうえ、ルーフドレンの径が150mmであったので、あご付きパラベットのあごの垂直面からルーフドレンの中心までの距離が400mm確保されていることを確認した。
- 3. 屋上のパラベットにおいて、オープン形式のアルミニウム製笠木の取付けに当たり、笠木部の固定金具の取付け完了後、コーナー部分の笠木を先に取り付け、直線部分の笠木については、両端から定尺部材を取り付け、中央部に調整部材を取り付けた。
- 4. 建具工事において、防火扉の危害防止装置の検査については、扉の閉鎖時間をストップウォッチにより測定し、扉の質量により運動エネルギーを確認するとともに、プッシュルゲージにより閉鎖力を測定した。

金属屋根

樋

金属

笠木

建具

各種工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

- 1. 耐火建築物におけるメタルカーテンウォール工事において、下階から上階への延焼と火災を防止する層間ふさぎについては、カーテンウォール部材の挙動により耐火材が脱落しないように厚さ1.6mmの鋼板の層間ふさぎを受けを取り付けた。
- 2. 鉄筋コンクリート造の建築物における断熱工事の断熱材打込み工法において、型枠取り外し後にフェノールフォーム保温材が欠落している部分を発見したため、その部分のコンクリートをはつき取り、断熱材現場発泡工法により隙間なく補修した。
- 3. 現場発泡工法による断熱工事において、総厚さ30mmの吹付け硬質ウレタンフォーム断熱材の吹付け方法については、厚さ5mm以下で下吹きを行った後、発泡体表面が平滑になるよう、多層吹きとした。
- 4. 戸建て住宅の換気設備工事において、排気ダクトについては、雨仕舞いに優れた形状の丸型ベントキャップを用いたので、排気効率を考慮し、住戸内から住戸外に向かって、先上がり勾配とした。

金属CW

断熱

断熱

換気

ダクト勾配

各種工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

- 1. アースドリル工法による場所打ちコンクリート杭工事において、コンクリート打込み直前に行う二次スライム処理については、底ざらいバケットにより行った。
- 2. 鉄骨工事の建方における建入れ直し及び建入れ検査については、建方の進行とともに、小区画に区切って行った。
- 3. 屋上緑化工事において、耐根層は、防水層に植物の根が直接触れないように、防水層の保護コンクリートの上部に設けた。
- 4. シーリング工事において、コンクリート部材と金属部材である窓枠まわりの目地については、特記がなかったので、2成分変成シリコン系シーリング材を使用した。

杭

鉄骨

防水+屋上緑化

シーリング

次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

- 1. タイル先付けプレキャストコンクリート工法における引張接着強度検査については、引張接着強度が0.4N/mm2以上で、コンクリート下地の接着界面における破壊率が50%以下のものを合格とした。
- 2. 外壁乾式工法による張り石工事において、石材の裏面と躯体コンクリート面との間隔(取付け代)を、70mmとした。
- 3. 施工中の建具の鍵について、コンストラクションキーシステムを用いたので、施工後に、シリンダーを取り替えることなく工事用の鍵から本設用の鍵に切り替え、不用になった工事用の鍵を提出させて、その確認を行った。
- 4. 塗装工事において、屋外に露出する鉄鋼面への錆止め塗料塗りについては、鉛・クロムフリーさび止めペイントを使用した。

PCa+タイル

石

建具

鍵

塗装

各種工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

- 1. コンクリート壁下地面におけるせっこうボードのせっこう系直張り用接着剤による直張り工法において、厚さ12.5mmのせっこうボードの張付けに当たり、コンクリートの下地面からせっこうボードの仕上がり面までの寸法を25mmとした。
- 2. 鉄骨造の柱脚部を基礎に緊結するために設置するアンカーボルトについては、特記がなかったので、二重ナット締めを行ってもボルトのねじが3山以上突出する高さで設置した。
- 3. 内装工事において、天井に設ける点検口の取付けに当たり、軽量鉄骨天井下地の野縁及び野縁受を溶解し、その開口部の補強を行った。
- 4. 外壁乾式工法による張り石工事において、上下の石材間の目地幅を調整するためのスペーサーを撤去した後に、シーリング材を充填した。

ボード

鉄骨

軽鉄下地

石

H25 21

H26 21

H27 21

H28 21

H29 21

H30 21

R3 21

R元 21

R4 21